

【講演記録】

瀧口修造と瀧口綾子

大谷省吾

まえがき

ここに講演記録として収録するのは、当館2階ギャラリー4で開催されたコレクションによる小企画「瀧口修造と彼が見つけた作家たち」(2018年6月19日-9月24日)に付随した連続ミニレクチャー「瀧口修造をもっと知るための五夜」の第三夜として行われたものである。ミニレクチャー全体は、第一夜「瀧口修造と“物質”」(7月27日)、第二夜「瀧口修造とデカルコマニー」(8月10日)、第三夜「瀧口修造と瀧口綾子」(8月24日)、第四夜「瀧口修造と帝国美術学校の学生たち」(9月7日)、第五夜「瀧口修造と福沢一郎」(9月21日)で構成され、各回30分、講師はすべて大谷省吾が務めた。このうち瀧口綾子に関して行った第三夜のレクチャーは、彼女の作品で現存するものがこれまで全く確認されていないこともあり、先行研究がほぼ皆無に等しいため、記録として残しておきたいと考え、本号に収録することとした。講演は30分の短いものであったが、本号収録にあたり、発表の根拠となる出典等について註を付した。また講演記録とは別に、今後の研究のために瀧口綾子年譜を付した。

調査段階でお話を伺わせていただいた故鈴木陽氏、および河村眞弓氏に深く感謝申し上げる。

講演記録

それでは時間となりましたので、ミニレクチャーを始めたいと思います。本日はご来館ありがとうございます。当館でコレクションの担当しております大谷と申します。どうぞよろしく願いいたします。いま、2階のギャラリー4で開催しております「瀧口修造と彼が見つけた作家たち」という小企画に関連して、今日はお話をさせていただくのですが、実は、今日の講演会はひじょうに短いです。「連続ミニレクチャー」と銘打っていますが、30分の短いお話を、展覧会会期中に全部で5回、行います。講演会ってというのは、たいてい90分やりますけれども、瀧口修造をめぐるあれこれお話ししようとすると、90分では取まらないんですね。そこで、いくつかのトピックスに分けて、それ

ぞれ言いたいことを絞って、5回に分けてお話することにいたしました。

(スライド) 大辻清司《瀧口修造夫妻》1975年

今日は、瀧口修造の奥さんの綾子さんについてご紹介したいと思います。いま会場に展示されている、大辻清司さんが撮影したこの写真、これは1975年に撮影されたものですから、瀧口修造の晩年の姿になりますけれども、この左に写っている女性が綾子さんですね。

このたびの5回の連続ミニレクチャーの中で、今回の綾子さんの話だけはちょっと特殊です。その他の4回は、展示されている作品のことに触れながらお話をするのですが、今回だけは、会場に綾子さんの作品はありません。それもそのはずで、綾子さんの作品は、1点も残っていないのです。どこかに残っているかもしれませんが、少なくとも公には確認されていません。たぶん、みなさんも綾子さんの作品のことはご存じないと思うのですが、彼女は実をいうと、1930年代にはたいへん注目を浴びていた新進画家でした。けれども戦争で自宅にあった作品はすべて焼けてしまって、そして戦後は制作をやめてしまったので、今では全く彼女の作品を見ることができないのですね。

でも、私は彼女を再評価したくてですね、戦前の美術雑誌で彼女の作品の図版が掲載されているものを見つけてはコピーをとってきました。いつかそれらをまとめて紹介する機会ができればいいなあ、と思っていたのですが、今回、連続でミニレクチャーをすると決めたときに、ここでぜひ綾子さんを紹介したいと考えた次第です。ご紹介する図版は残念ながらすべて白黒ですけれども、私が25年かけて集めた図版をすべてお見せします。こんな画家がいたんだ、ということ、ぜひ知っていただきたいと思います。

(スライド) 瀧口綾子 略年譜

作品を見ていただく前に、ざっと綾子さんの経歴をご紹介します。彼女の旧姓は鈴木です。彼女は1911年9月20日に、山形県の米沢に生まれました。だから瀧口修造より8歳年下ですね。そしてまた1911年生まれといえますと、岡本太郎と同じ年です。お父さんは商工省で染織関係の仕事をしていました。ま

た、父方の祖父と、母親の妹も日本画家でしたから、家庭環境としては、美術がわりと身近だったということが出来ます。熊谷高等女学校を卒業したあと、画壇デビューは1932年、第2回独立美術協会展でした。

(スライド) 第2回独立展目録

実はこのとき、ペンネームといえますか、ちょっと漢字をかけて「鈴木阿耶子」の名前で出品しているの、今まで誰も綾子さんと気づきませんでした。でも当時の出品目録には、出品者の住所が記されていて、それをみると、彼女の住んでいた住所になっていますので、本人にまちがいないと思います。このあと彼女は、独立美術協会に第4回展まで出品します。

(スライド) 独立不出品同盟

けれども、1934年の第4回独立展に出品して、その会期中に、彼女は数名の仲間たちと、「独立不出品同盟」というのを結成します。これはどうしてかといえますと、独立美術協会というのはもともと、

(スライド) 独立美術協会 福沢一郎 vs 里見勝蔵

里見勝蔵ら、いわゆる「日本的フォーヴィスム」とよばれる傾向の人たちが主流でした。はげしい筆致と強烈な色彩で、画家の主観を重視した表現ですね。その一方で、福沢一郎を中心に、シュルレアリスムの影響を受けた、より前衛的な傾向が次第に力をつけて、毎年、審査のときに対立するようになりました。この第4回展のとき、里見のグループのほうで勢力拡大の工作のようなものがあり、福沢のグループのほうは怒るわけです。その中でも、とくに強硬な態度を示したのが「独立不出品同盟」の人たちで、綾子さんもこれに参加しました。

(スライド) 新造型美術協会

彼らは独立美術協会の会員ではなくて、まだ一般出品者でしたが、この年かぎりで独立展に出品するのはやめて、新たに「新造型美術協会」という団体を結成します²⁾。これがメンバーです。こうやって名前を並べても、現在は忘れられている人がほとんどです。ひとり外国の人がいます。ジョスタ・ゲオルギー・ヘミングというスウェーデンの人で、本業はデザイナーです。ピアニストのフジコ・ヘミングのお父さんです。

(スライド) 新造型美術協会 メンバーの作品

彼らはこんな作品を描いていました。少しだけ作品が残っていて、板橋区立美術館などに収蔵されています。ご覧の通り、シュルレアリスムの影響を強く受けた作風です。

(スライド) 新造型美術協会の活動年表

彼らは1935年1月に第1回展を開催し、1937年まで活発に活動を続けました。展覧会のほか、グループの機関誌も4号まで発行しています。この機関誌は、日本におけるシュルレアリスムの受容を研究する上で、きわめて重要なものです。

(スライド) 『新造型』主要記事

というのは、メンバーのテキストや作品図版だけでなく、瀧口修造と山中散生という、日本にシュルレアリスムを紹介するのに重要な役割を果たした詩人2人が、たびたび寄稿しているからです³⁾。そして、瀧口修造はこのグループを理論的にサポートするうちメンバーと親しくなって、それで1935年12月に綾子さんと結婚します。ということで、これ以前は鈴木綾子、これ以後は瀧口綾子の名前で発表をしていますが、それではいよいよ、作品を見ていきたいと思います。

(スライド) 《羊齒たち》1934年：図1

図版が確認できるいちばん古い作品はこれです。第4回独立展に出品した《羊齒たち》という作品です。ちょっと見ただけだとキュビズム風の静物画にしか見えないかもしれませんが、一筋縄ではいかないと思います。どうしてか。詳しく見ていきましょう。机の上に、植物採集用の籠が乗っていて、その中にシダ植物が入っています。机の上には他にも植物の葉のついていて、また周囲の空間はちょっと不思議な具合になっています。左上のほうには開いた本のようなものが見えます。そして気になるのが、机の上に書かれた化学記号なのですけれども、 $C_{17}H_{19}NO_3 + H_2O$ っって書いてあります。これ、調べてみたらモルヒネなんですね。麻酔薬です。その下に漢字で「阿」っって書いてあります。モルヒネはアヘンから抽出されます。だからこの「阿」はアヘンの「阿」かもしれないですし、そうするとこの頃、

(スライド) ジャン・コクトー、堀口大学訳『阿片』第一書房、1932年

フランスの作家ジャン・コクトーの小説『阿片』が日本にも翻訳されて読まれていましたから、コクトーが麻薬によって得ていた幻想というものに、彼女は関心があったのかもしれない。

(スライド) 《私の耳は貝の殻海の響を懐しむ》1934-35年：図2

次はこれです。独立美術協会に出品するのをやめて、仲間たちと結成した「新造型美術協会」の第1回展に発表しました。この題名、やっぱりコクトーの詩からとっていますね。このとき彼女は全部で10点、出品しているのですが、図版が確認できるのはもう1点だけ、

(スライド) 《覗く》1934-35年：図3

これですね。顕微鏡と、その中を覗いたときに見えるようなイメージが重ねられています。このほか、当時の美術雑誌に展覧会の会場写真が掲載されていて、

(スライド) 新造型美術協会 第1回展会場写真：図4

この写真の左半分がちょうど綾子さんの壁ですので、他の作品もどんな感じだったか多少わかります。このときの彼女の作品について、独立展の前衛傾向のリーダーだった福沢一郎

は「私を最も感動させた⁴⁾と絶賛しています。次にいきますと、

(スライド) 《コップが来る》1935年：図5

これは1935年の9月に開催した新造型の秋のシーズンの展覧会に発表したものです。このとき瀧口修造は展覧会評で、彼女がもう1点出品していた《少女図解》という作品について「女性的サンチマンの下に意識の残酷さを秘めた不思議な絵である⁵⁾という批評をしています。残念ながら、これについては図版が確認できないのですが、どんな絵だか気になります。

(スライド) 《ミルクとフェアリー》1935-36年：図6／

《風景》1935-36年：図7

翌年の第2回新造型展には、彼女はこの2点を出品します。このうち、《風景》のほうは、瀧口修造が作品の写真をパリのアンドレ・ブルトンたちに送って、この2年後の1938年に、パリで出版された『シュルレアリスム簡約辞典』(*Dictionnaire abrégé du surréalisme*) というのに図版が掲載されます。

(スライド) 『シュルレアリスム簡約辞典』：図8

こういう具合に掲載されています。このとき、日本人の画家でこの辞典に図版が掲載されたのは、綾子さんの他に、同じ新造型美術協会のメンバーだった今井滋と下郷羊雄の作品、

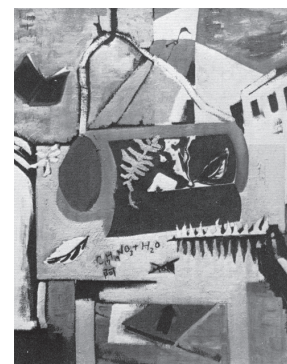


図1 《羊齒たち》1934年

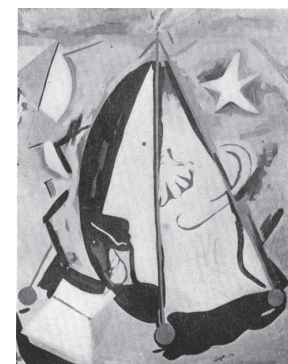


図2 《私の耳は貝の殻海の響を懐しむ》1934-35年



図3 《覗く》1934-35年



図4 新造型美術協会 第1回展会場写真 『美術』10巻2号、1935年2月



図5 《コップが来る》1935年

それから当時、帝国美術学校(現在の武蔵野美術大学)の学生だった大塚耕二の作品でした。大塚の話は次回のミニレクチャーでいたします。

(スライド) 《スプーンの奇跡》1936年：図9

続いて1936年9月の展覧会の作品です。これはちょっとダリを思わせるところがある作品です。でも穴のあいたスプーンというのは、たぶん彼女としては何かを象徴させたい思いがあったと思います。そしてこのリボンが蝶々のように不思議な生命感をおびているのにも注目したいです。片方はピンでとめられていますけれども、もう片方は飛び立とうとしています。そして一番大事なものは、これらのモチーフ、いずれもきわめて身近なものとして、テーブルの上にはちらばっているわけですが、ここに三日月のようなものも描かれていて、スケールとしてテーブルの上のようでもあり、地平線のある広大な風景のようでもある、そのあたり、意図的に両方にとれるように描かれているのです。そうすることによって、おそらく衣食住に関わるイメージ、あるいは家庭の中というイメージと、その外へと出ていこうとする願望とが、重ねられているようにも読めるのではないかと思うのですね。だとすると、女性画家としての綾子さんが、女性として家庭

内で果たさなければと考えていることと、アーティストとして外へと出ていこうとする願望との間の、ゆるる気持ちのようなものが、ひょっとしたらこの絵には込められているのではないかと、いうようにも解釈してみたくなるのです。

(スライド)《スプウンの奇跡》習作素描：図10

これについては、習作と思えるドローイングの図版が『みづゑ』という雑誌の9月号の扉に掲載されています。こちらでも、テーブルの上なのか、地平線のある広大な空間なのか、両義的です。

(スライド) 第4回新造型展 集合写真：図11

ちなみに、この展覧会るとき会場で撮影された集合写真というのが残ってまして、これが綾子さんです。ショートカットで、華奢だけれども、なんだか凛々しいですね。そして奥のほうにちょっとだけ顔を出しているこの人が、瀧口修造です。

(スライド) 第5回新造型展目録

続いて1937年3月に開かれた第5回展です。このとき綾子さんは、瀧口修造と共作でデカルコマニーを8点、それから油彩2点とフォトデッサン6点を出品していたことが確認できます。フォトデッサンというもひじょうに気になりますが、これは残

念ながらどういものだったか記録が残っていません。そして瀧口修造と共作のデカルコマニーというのも、前回のミニレクチャーでも話題にしましたが、これは具体的にどう共作したのか、わからないのです。おそらく二人でたくさん作って、二人で気に入ったものを選んだのだと思うのですが、彼女のデカルコマニーは当時の美術雑誌で3点、確認することができます。

(スライド)《デカルコマニー》図12-14

こういうものですね。いずれも、ひじょうにイメージ喚起力がつよい、魅力的な作品だと思います。そしてまた、このデカルコマニーを雑誌に掲載するにあたり、彼女は文章も添えていて、そこで書かれている、デカルコマニーから彼女が連想していったイメージというのがひじょうに魅力的です。前回のミニレクチャーでも紹介しましたが、また同じところを読んでみます。

(スライド) 瀧口綾子「不思議な窓・デカルコマニー」

「不思議な泡、恐ろしく速く飛ぶ森、恐ろしく意力的な岩石、飛ぶもの、囁くもの、永遠の沼の中や、悲劇的な夜の砂漠、星の散る鍾乳洞、喪失と愛撫と、様々な暗示にみちあふれる輪郭のこのイリュージョン^⑧」というのです。偶然にできた絵具の模様から、固定したイメージを読みとるのではなく、次から次

へと連想が広がってイメージが流動していくのがおもしろいです。これは、瀧口修造のデカルコマニー理解とも同じスタンスだと思います。

(スライド) 海外超現実主義作品展 会場写真／瀧口修造・阿部芳文『妖精の距離』

ちょうどこの第5回新造型展が開かれた頃、1937年というのは、シュルレアリスムが日本でいちばん盛り上がりつつあった時代です。この年の6月に、瀧口修造は「海外超現実主義作品展」というのを山中散生といっしょに企画開催しますし、秋には画家の阿部芳文といっしょに『妖精の距離』というすばらしい詩画集を刊行します。けれども、彼女が所属していた新造型美術協会は、ちょうどこの頃、活動を停止してしまいます。はっきりした理由はわからないのですが、少ないメンバーでやっていくには、活動資金が足りなかったということが一因だったようです。

(スライド) 美術文化協会第1回展 集合写真：図15

そのあとの彼女の活動ですが、1939年に福沢一郎が、独立美術協会を脱退して、彼を慕う前衛画家たちと一緒に「美術文化協会」という団体を結成します。そこに彼女も参加するの

ですね。これは1940年4月に開かれた第1回展の集合写真です。綾子さんはここ、中央の垂れ幕のすぐ右です。

(スライド)《休みの日》1940年：図16

そしてこのとき、彼女はこういう作品を出品します。これはちょっと、マグリットを連想させますね。マグリットには、

(スライド) マグリット《リスニングルーム》1952年

こういう作品があります。舞台設定はけっこう似ていますね。けれども、綾子さんの作品では球が部屋の中と窓の外にあって、その関係に関心があるようにみえます。それに第一、マグリットの作品は戦後のものですから、直接的な影響ではありません。もっとも綾子さんはこの頃、マグリットが好きだったと、瀧口修造自身が戦後の文章で書いています^⑨。

(スライド)《球のある室内》1940年：図17

彼女は美術文化協会の機関誌に、こういう習作の素描を載せています。そしてこの素描と一緒に、こんな詩も書いているのですね^⑩。読んでみます。

(スライド) 瀧口綾子「絵を描かないとき」

絵を描かないとき、海の電話がきこえます。

黄色の夕ぐれに 白い球体が静止します。



図6 《ミルクとフェアリー》1935-36年

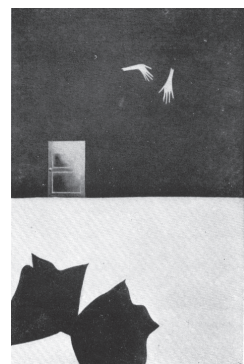


図7 《風景》1935-36年



図8 *Dictionnaire abrégé du surréalisme*, 1938年



図9 《スプウンの奇跡》1936年

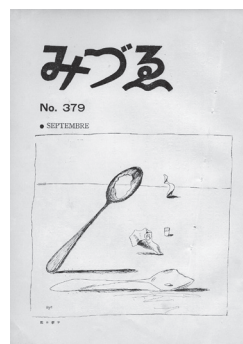


図10 《スプウンの奇跡》習作素描『みづゑ』379号、1936年9月



図11 第4回新造型展 集合写真『アトリエ』13巻11号、1936年11月

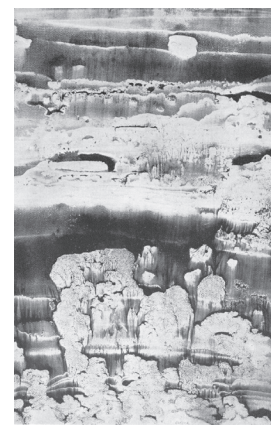


図12 《デカルコマニー》1937年『アトリエ』14巻5号、1937年5月



図13 《デカルコマニー》1937年『みづゑ』387号、1937年5月

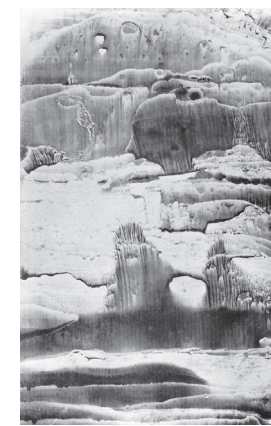


図14 《デカルコマニー》1937年『みづゑ』387号、1937年5月



図15 第1回美術文化協会展 集合写真1940年

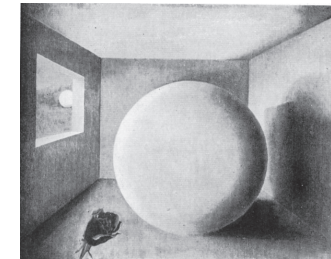


図16 《休みの日》1940年

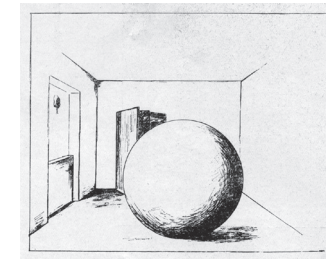


図17 《球のある室内》1940年

少女のすんだ歌声が消えると、
リボンから無数の白い蝶が飛び立つてせう。
そして白い月のなかへ帰へつてゆくのでせう。

★

うらかな日にはみどりの樹木がまばたきをします。
あかるい窓。太陽。鳩。
球体。

こうした感覚というのは彼女一流のものといつてよいと思います。

(スライド)《こま》1941年：図18

これが、図版で確認できる彼女の最後の作品です。美術文化協会の、機関誌の6号に掲載されています。この号に図版掲載されている作品というのは、他はみんな美術文化の第2回展への出品作品なのですが、彼女は、この作品を展覧会のほうには出していません。どうしてかという、この展覧会は1941年4月27日からだったのですが、その少し前、4月5日に、瀧口修造と、それから美術文化協会のリーダーだった福沢一郎の二人が、治安維持法違反の疑いで検挙されてしまうのですね。シュルレアリスムは共産主義と関係がある、危険思想だとみなされたわけです。そういうことがあったので、おそらく綾子さんは展覧会に出品するつもりで、雑誌のほうには図版を入稿していたのだけれども、展覧会には出品しなかったのだと考えられます⁹⁾。瀧口と福沢は、7ヶ月ほど拘留されて、1941年の11月11日に保釈されます。そのあとは、思うような活動ができず、そして1945年5月25日の空襲で、瀧口の家は綾子さんの作品も含めてすべて焼けてしまう、ということになります。

戦後になってから綾子さんは、なぜか制作を再開しませんでした。ということで現状、彼女の作品というのは、当時の雑誌

に掲載された図版からしか知ることができません。ここまでは、展覧会に出品された作品だけ見てきましたが、最後に駆け足で、その他の仕事も数点ご覧いただきます。

(スライド)「暗殺された詩人」1935年：図19

これはさわめて貴重な、瀧口修造とのコラボレーションです。瀧口が、『セルパン』という雑誌にアポリネールの「暗殺された詩人」という小説を翻訳して、そこに絵がほしいということで、瀧口が綾子さん、これは結婚する少し前ですが、綾子さんに依頼したものです。古代ギリシャの神話風の人物と、現代の風俗とが混在した、ひじょうにユニークな絵です。

(スライド)「一秒のコント」：図20

これは『阿々土』という雑誌に掲載されたもので、綾子さんの詩¹⁰⁾と絵が組み合わされています。こういうものです。

小麦いろの光りがひとみをくぐつて出て参りました。彼女の愛らしい小筐をおつことしながら
窓の空はあんなに碧くて、私の中の少女の扉をすするとあけてしまひました。
その少女はウエイルの翼を持つて居りました。
その少女は語るので御座います
星の髪を結ぼうとしたら詩人の頭の上におつこちてしまつたの
夜は花咲く紫の薔薇をとつて、とつて詩人さん!
そしてかみりの音が、電話の声のやうに、耳の中をころがってゆくのでした。
「みよ、海賊船が!」

以上です。「一秒のコント」という題名の通りに、一瞬のうちにさまざまなイメージが連想されていくようなおもしろさがあり

ます。

(スライド)『新造型』1号のデッサン：図21

(スライド)『新造型』4号のデッサン：図22

これは綾子さんが所属していた新造型美術協会の機関誌の第1号、第4号に掲載されたデッサンです。

(スライド)『蠟人形』カット 1937年：図23

それから、西条八十という詩人が出していた『蠟人形』という詩の雑誌がありまして、綾子さんはこの雑誌に1937年からカットを提供していました。ここでも瀧口修造とコラボレーションしています。

(スライド)『蠟人形』カット 1937年：図24-36

これらも、ちょっとしたものではありませんが、シャープで、キラキラと輝くような素敵なイメージになっています。

(スライド) 本日のまとめ

綾子さんの作品を駆け足で見えてまいりました。そうすると、図版だけから判断するしかないのですが、彼女の作品は、ひじょうに繊細な神経が隅々まで行き届いていて、詩的なさまざまな象徴的意味を含んだ魅力的なものだったことが垣間見えます。戦後、忘れ去られてしまったことが私にはひじょうに残念で、今日いらしていただいたみなさんには、ぜひ、こんな素敵な画家がいたのだということ、覚えてお帰りいただきたい。そしてまた、もし彼女について、彼女の作品について何か情報をお持ちの方は、ぜひ教えてください。それでは時間となりましたので、このあたりで本日の話をおしまいたします。ありがとうございました。

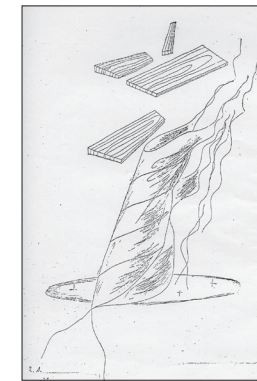


図21 デッサン『新造型』1号、1935年9月

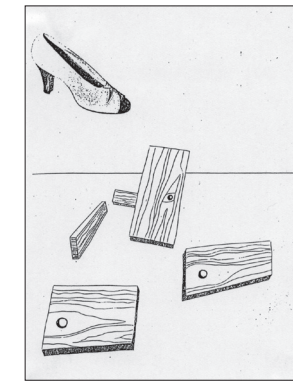


図22 デッサン『新造型』4号、1937年3月

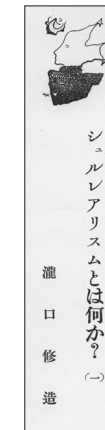


図23 カット『蠟人形』1937年



図24 カット『蠟人形』1937年

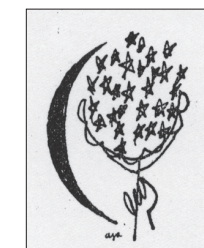


図25 カット『蠟人形』1937年

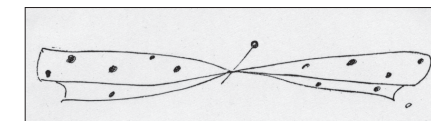


図26 カット『蠟人形』1938年

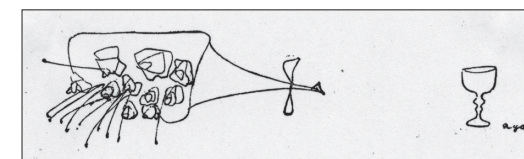


図27 カット『蠟人形』1938年

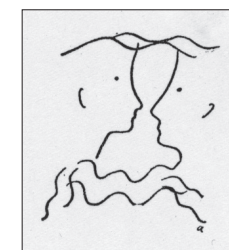


図28 カット『蠟人形』1938年

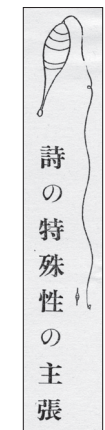


図29 カット『蠟人形』1938年

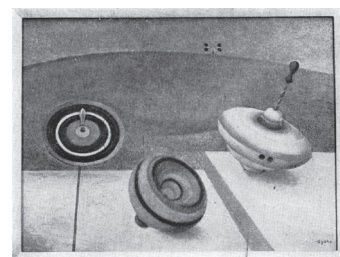


図18 《こま》1941年



図19 「暗殺された詩人」挿画『セルパン』55号、1935年9月

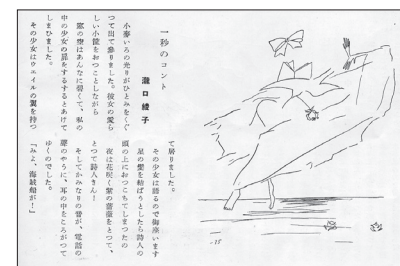


図20 「一秒のコント」『阿々土』14号、1936年10月



図30 カット『蠟人形』1938年

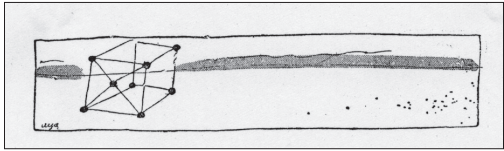


図31 カット『蠟人形』1938年

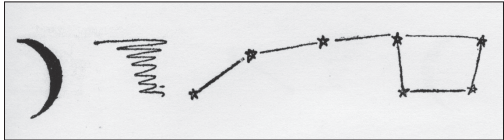


図32 カット『蠟人形』1938年

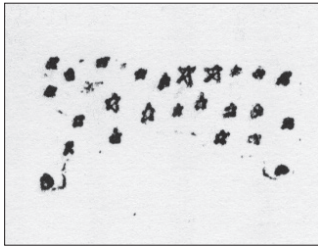


図33 カット『蠟人形』1938年

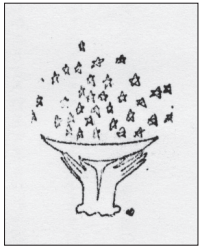


図34 カット『蠟人形』1938年



図35 カット『蠟人形』1938年



図36 カット『蠟人形』1938年

註

- 1) わずかな先行研究として以下の二つを挙げることができる。
鶴岡善久「鈴木（瀧口）綾子・早瀬龍江」『日本シュルレアリスム画家論』沖積舎、2006年7月、179-188頁。
池田良平「浜田浜雄と瀧口修造、綾子夫人 キーワードは米沢」『詩人と美術 瀧口修造のシュルレアリスム』図録、市立小樽美術館他、2013年5月、127-129頁。
- 2) 新造型美術協会の創立会員は池ノ内篤人、今井滋、内田慎蔵、神戸政輔、島津純一、鈴木綾子、内藤外次、中野政行、成田重文、野口道方、長谷川善四郎、藤田鶴夫、ジョスタ・ゲオルギー・ヘミング。のち下郷羊雄、宮城輝夫が加入。同協会の活動については、『日本のシュルレアリスム』展図録（名古屋美術館、1990年）、および山田論「ある前衛芸術家の生活と創作—『下郷羊雄日記』より—」（『名古屋美術館研究紀要』1巻、1992年）で詳しく紹介されている。
- 3) 瀧口と山中の機関誌『新造型』への寄稿は次の通り。第2号（1936年1月）：瀧口「超現実と現代文化」、山中「超現実の世界」、第3号（1936年9月）：瀧口「詩と絵画について」、山中「OBJET SURREALISTEの問題」、第4号（1937年3月）：瀧口（アルトンの翻訳）「通底器（幻影物体）」、山中（バシュアルの翻訳）「芸術に於ける超合理主義の適用」。二人はまた第5回新造型展（1937年3月）では作品も出品している。
- 4) 福沢一郎「新造型美術展を観る」『美術』10巻2号、1935年2月、76頁。
- 5) 瀧口修造「新造型秋季展」『美術』10巻11号、1935年11月、49頁。
- 6) 瀧口綾子「不思議な窓・デカルコマニイ」『アトリエ』14巻5号、1937年5月、頁付無。

- 7) 瀧口修造「マグリットの「不思議な国」」『シュルレアリスムと画家叢書「骰子の7の目」月報』1号、河出書房新社、1973年10月、頁付無。以下に該当部分を引用する。
「その頃、マグリットの絵に惹かれていたひとりの女性の画家が私の身近にいた。生活がいよいよ暗い圧迫感を増していたとき、なぜ彼女は底抜けの明るさをえがこうとしたのか、マグリットの知的アイロニーに欠けていたにしても、彼女は青空のしたの緑の丘の斜面に色鮮やかな巨大な独楽が休息している、静物とも風景ともつかぬカンバスをえがいた。やがて特高刑事が突然訪れたとき、その前に立って、なぜ独楽がこんなに大きいのか、と執拗に彼女に食いさがっていた光景が眼に焼きついている。絵はまもなく空襲で燃え、それ以後彼女は絵筆を捨てた。彼女とは瀧口綾子である。」
- 8) 瀧口綾子「絵を描かないとき」『美術文化』3号、1940年4月、36頁。
- 9) 吉井忠日記（『池袋モンパルナス展』図録、板橋区立美術館、2011年11月に収録、弘中智子による書き起こし）によれば、1940年4月11日から開催の美術文化第1回展のための各作家の作品撮影は3月15日前後だったらしい。展覧会開始の約1ヶ月前に作品を撮影していたものと察せられる。翌1941年も同様と考えれば、4月27日から開催の第2回展のためには、3月末頃には作品写真撮影ははずである。その後まもない4月5日に、瀧口修造は検挙された。註6で引用した特高とのやりとりは、このときのものであった可能性が高い。おそらくこうしたやりとりがあったため、彼女は《こま》を第2回展に出品することを見合わせたものと考えられる。
- 10) 瀧口綾子「一秒のコント」『阿々土』14号、1936年10月、22頁。

瀧口（鈴木）綾子 年譜

大谷省吾・編

1911(明治44)年
<p>9月20日 山形県米沢市に生まれる。父親、鈴木寛也は染織関係の技術系国家公務員として商工省に勤務。9人の兄弟姉妹の長女。父方の祖父、鈴木小太郎(1859-1917)は蘭涯(らんがい)と号した南画家で、父親の弟は俳優の伴淳三郎(本名:鈴木寛定、1908-1981)、母親キクの妹、吉池みつ(1896-1924)は青園女と号した日本画家だった。【典拠:池田良平「浜田浜雄と瀧口修造、綾子夫人 キーワードは米沢」『詩人と美術 瀧口修造のシュルレアリスム』展図録、市立小樽美術館他、2013年、p. 127】</p>
<p>熊谷高等女学校を卒業。</p>
1932(昭和7)年
<p>3月19日-4月14日 独立美術協会第2回展（東京府美術館）に鈴木阿耶子の名で《静物》を出品、初入選。このとき出品目録に記された住所は東京市外杉並町成宗39</p>
1933(昭和8)年
<p>3月10日-31日 独立美術協会第3回展（東京府美術館）に鈴木阿耶子の名で《風景》を出品。このとき出品目録に記された住所は東京市杉並区成宗1-39</p>
1934(昭和9)年
<p>3月20日-4月12日 独立美術協会第4回展（東京府美術館）に《羊歯たち》を出品。このとき出品目録に記された住所は東京市杉並区成宗1-39。展覧会会期中に「独立不出品同盟」に参加。</p> <p>4月13日 新造型美術協会の結成に参加。創立会員は池ノ内篤人、今井滋、長谷川善四郎、神戸政輔、中野政行、内藤外次、成田重文、内田慎蔵、野口道方、ジョスタ・ゲオルギー・ヘミング、藤田鶴夫、島津純一、鈴木綾子。</p>
1935(昭和10)年
<p>1月10日-19日 新造型美術協会第1回展（東京府美術館）に《海のトルソー (A)》《海のトルソー (B) (アラビアンナイト墜落)》《伝説》《風景》《夜間飛行》《眠く》《終末 (旗艦・Mの錨)》《出発》《B》《私の耳は貝の殻海の声を懐しむ》を出品。 「鈴木綾子氏の全く特異な天真のファンタジイと特に色彩が恵む生鮮なエレガンス」(瀧口修造「新造型美術展」を観る)『国民新聞』1935年1月17日 「鈴木綾子君は、この会での紅一点であるがその作品はまた婦人としては実に珍らしい才能を持つてゐる。「海のトルソー」二点、「伝説」、「夜間飛行」、「眠く」、其他五点、いづれも面白い。散文の読める人は多いが詩の分る人は少ない。此等の作品が、物語る華麗な詩は、リズムの上に築れた建築の中に納められてゐる。」(税所篤二「第一回新造型美術展」『アトリエ』12巻2号、1935年2月、p. 52) 「鈴木綾子さんの諸作は、私を最も感動させたと言つてよい。何れの作を見ても、此人一流のスタイルの中に清新な感覚が流露してゐる。決して迷はず、止まらず、ひたむきに黙々として描き続けたのであらう、十点の作品の美しい巧緻の中に、私達を打つ切実な魂を聴く事が出来る。「眠く」、「夜間飛行」「私の耳は貝の殻、海の響を懐む」などすばらしい画面効果を持つてゐる。切に長養研究を望み度い。」(福沢一郎「新造型美術展を観る」『美術』10巻2号、1935年2月、p. 76) 「鈴木綾子君の諸作は女性らしい柔かさに包まれて好もしいが、欠点もそこから来てゐる。」(長谷川三郎「新造型展評」『みづゑ』360号、1935年2月、p. 150) 「鈴木綾子さんもまだ十分シュールレアリスム的な精神を把握してゐない。主題が十分メタモルフォーズしないで説明されすぎる。シュールレアリストたるためには、オブジェ・シュールレアリストが理解されてゐなければならない。」(無署名「新造型美術協会・第一回展」『洋画研究』21号、1935年2月、p. 15) (図版)《眠く》(『美術』10巻2号、1935年2月) (図版)《眠く》(『美之國』11巻2号、1935年2月) (図版)《私の耳は貝の殻》(『みづゑ』360号、1935年2月) (図版)会場写真《《眠く》《終末 (旗艦・Mの錨)》《出発》《B》《私の耳は貝の殻海の声を懐しむ》が確認できる》(『美術』10巻2号、1935年2月) 9月 『セルバン』55号掲載のギヨーム・アポリネール、瀧口修造訳「暗殺された詩人」に挿画を描く (p. 134)。</p>
<p>9月10日-14日 新造型美術協会秋季展（銀座青樹社）に《少女図解》《コップが来る》を出品。 「鈴木綾子君の作品がよい素質を持つてゐたやうに記憶する」(尾川多計「新造型秋季展」『アトリエ』12巻10号、1935年10月、p. 66)</p>

<p>「鈴木綾子《少女図解》白い影ある鎖は白狐のやうに悲しかった。しかし少女の自由の夢はいつも真紅のばらを落してゆく。」(瀧口修造「若き美術」『セルバン』57号、1935年11月)</p> <p>「鈴木綾子の『少女図解』は女性的サンチマンの下に意識の残酷さを秘めた不思議な絵である。かうした意識と客観との飽和をポエジイの中に女性作家の素質で追求することを望む。二作とも少し固く纏めすぎた不満はあるが。」(瀧口修造「新造型秋季展」『美術』10巻11号、1935年11月、p. 49)</p> <p>「鈴木綾子氏　15、少女図解——静穏なるもの階調詩になつてゐる。16、コツプが来る——伴奏律色も美しい構図も賛成。」(寺田政明「新造型美術展」『三田文学』10巻11号、1935年11月、p. 217)</p> <p>「鈴木綾子の『少女図解』『コツプが来る』いづれも、都会人の明敏な感覚を示してゐるのが特色で、豊かな空想を輝かし出すに洗練と典雅とをもつてしてゐる。」(成田重郎「新造型美術の秋季展」『みづゑ』369号、1935年11月、p. 392)</p> <p>「鈴木綾子の神経はこのグループの注射器の針だ。「コツプが来る」は画面空間にまきちらした型体感情の収穫だ。」(四宮潤一「新造型美術協会展」『阿々土』9号、1935年12月、p. 77)</p> <p>(図版)《コツプが来る》(『セルバン』56号、1935年10月、p. 112)</p> <p>(図版)《コツプが来る》(『みづゑ』368号、1935年10月)</p> <p>(図版) 会場写真 (『美術』10巻11号、1935年11月)</p> <p>9月5日　『新造型』1号にデッサン1点を寄稿。</p> <p>12月14日　瀧口修造と結婚。[典拠：土淵信彦編「年譜」『瀧口修造の造形的実験』展図録、富山県立近代美術館、渋谷区立松濤美術館、2001年、p. 189]</p>
1936(昭和11)年
<p>1月7日－18日　新造型美術協会第2回展（東京府美術館）に《風景》《作品》(《ミルクとフェアリイ》か?) を出品。</p> <p>「鈴木綾子の童話めいた作品にも女らしい優美が溢れ」(佐波甫「新造型美術第二回展」『アトリエ』13巻2号、1936年2月、p. 37)</p> <p>「諸君の作も少しゆるんでゐる跡が見える。特にこの点で指摘しなければならない作家は、昨年相当の努力を示し、われわれにその将来を期待させた鈴木綾子君である。僕は君が昨年の展に見せて第一回呉れた『私の耳は貝の耳』とか云つた題名のものその他に於いてこの作家は今後大いに活躍するぞ——と、一人で喜んだものだが、今年の小品二点に接して、正直な話がガツカリした。これでは昨年の努力が水泡に帰したと云ふ外はない。」(加藤信也「新造型展とノウ展」『美術』11巻2号、1936年2月、p. 59)</p> <p>「鈴木綾子は女らしい優美に輝いて見える。」(佐波甫「『新造型』『春台』『白日』の三展」『みづゑ』372号、1936年2月、p. 173)</p> <p>(図版)《ミルクとフェアリイ》(『阿々土』11号、1936年3月、p. 53)</p> <p>(図版)《ミルクとフェアリー》(『アトリエ』13巻2号、1936年2月)</p> <p>(図版)《風景》(『美術』11巻2号、1936年2月)</p> <p>(図版)《風景》(『みづゑ』372号、1936年2月)</p> <p>(図版)《風景》(『洋画新報』51号、1936年2月、表紙)</p> <p>1月7日　『新造型』2号に「ミルクを飲む妖精たち」を寄稿。《風景》図版掲載。</p> <p>2月5日－9日　新造型美術協会名古屋展（名古屋丸善）に出品。</p> <p>「やがては清算されるであらうがセンチメンタルの残骸が逆に効果を生んだ」(亀山巖「新造型美術展を見る」『名古屋新聞』1936年2月7日)</p> <p>9月11日－15日　新造型美術協会第4回展（秋季展）(銀座青樹社)に《スプウンの奇跡》《日曜日》《風景》《少女》を出品。</p> <p>「瀧口綾子君は『少女』に女性的な感覚を『スプウンの奇蹟』のリボン、月、杯、ピン、匙を明快な黒碧のバックにおく佳品を示し」(佐波甫「新造型展」『日刊美術通信』1936年9月13日4面)</p> <p>「瀧口綾子は女流前衛画人中での宝石、女性的なサンチマンをもつて『スプウンの奇跡』を作している。机上のエメジャーはリボン、杯、匙、ピンと月との恋愛から無限に出発する」(四宮潤一「新造型美術第四回展」『阿々土』14号、1936年10月、p. 57)</p> <p>「どちらかと云へば装飾的效果を目指してゐる人として、今井滋氏、瀧口綾子氏が挙げられるであらう。」(内山義郎「新造型秋季展」『美之國』12巻11号、1936年11月、p. 94)</p> <p>「サンチマンの流れる瀧口綾子君の『スプウンの奇跡』『少女』、(中略)の方がよい。」(佐波甫「新造型秋季展」『みづゑ』381号、1936年11月、p. 444)</p> <p>(図版)《スプウンの奇跡》(『阿々土』14号、1936年10月、p. 57)</p> <p>(図版)《スプウンの奇跡》(『美之國』12巻11号、1936年11月)</p> <p>(図版)《スプウンの奇跡》(『みづゑ』381号、1936年11月)</p> <p>(図版) 会場集合写真 (『アトリエ』13巻11号、1936年11月)</p> <p>(図版) 会場集合写真 (『美術』11巻11号、1936年11月、p. 72)</p> <p>(図版) 会場集合写真 (『みづゑ』381号、1936年11月)</p>

<p>9月15日　『新造型』3号に《スプウンの奇跡》図版掲載。</p> <p>9月　『みづゑ』379号に扉絵掲載。</p> <p>10月　『阿々土』14号に「一秒のコント」とカットを寄稿（p. 22）。</p>
1937(昭和12)年
<p>3月16日－25日　新造型美術協会第5回展（東京府美術館）に《アリス》《風景》、フォトデッサン6点、および瀧口修造との共作のデカルコマニー8点を出品。</p> <p>「瀧口綾子君の二作は如何にもこの作家らしき純粹さ、恐らく何時もこの人の純粹な画作には好感をもつのであるが、唯なにか全体に手薄い未成的な感があつた。その点小品の方を取る。」(四宮潤一「新造型展評」『みづゑ』387号、1937年5月、p. 519)</p> <p>3月20日　『新造型』4号にデッサン1点を寄稿。</p> <p>5月　『アトリエ』14巻5号に「不思議な窓・デカルコマニイ」およびデカルコマニー1点の図版を掲載。</p> <p>5月　『みづゑ』387号にデカルコマニー2点を掲載（pp. 499–500）。</p> <p>6月13日－17日　新造型美術協会名古屋展（名古屋松坂屋）に1点出品。</p> <p>10月　『蠟人形』8巻10号にカットを寄稿。以後、1941年3月までほぼ毎月掲載。</p>
1938(昭和13)年
<p>1月　パリのボザール画廊で開催された国際シュルレアリスム展に際して刊行された<i>Dictionnaire abrégé du surréalisme</i>に“Le paysage”（1936年1月の新造型美術協会第2回展に出品された《風景》）が掲載される（p. 66）。</p> <p>4月29日－5月9日　造型版画協会第2回展（東京府美術館）に《デカルコマニイ》を出品。</p>
1939(昭和14)年
<p>5月17日　美術文化協会の結成に参加。</p> <p>8月1日　『美術文化』1号にアンケート回答「現代の前衛美術を如何に進めてゆきたいか」(p. 11)および「美術文化時評　モード」(p. 18)を寄稿。</p>
1940(昭和15)年
<p>4月3日　『美術文化』3号に素描《球のある室内》図版掲載。また詩「絵を描かないとき」を寄稿（p. 36）。</p> <p>4月11日－19日　美術文化協会第1回展（東京府美術館）に《休みの日》《蜃気楼》を出品。</p> <p>「瀧口綾子の「休みの日」「蜃気楼」は共に独自の清新さを持つてゐるにも拘らずメチエの幼稚さがそのアイデアを造形的に生かすことが出来なかつたのは甚だ惜まれた」(北園克衛「美術文化展評」『日刊美術通信』1940年4月20日4面)</p> <p>「瀧口氏の『休み日』は、球体と立方体による作詩、その寓意は簡素で静かな直示で、かうした語法も外国作家にかなりあるのでオリヂナルなものではないが、感情は徹つてゐる。」(林達郎「美術文化協会第一回展」『美之國』16巻5号、1940年5月、p. 32)</p> <p>「瀧口綾子——この人は真白い丸がお好きです。額縁も真白い丸型。」(小松義雄「美術文化第一回展」『現代美術』8巻4号、1940年6月、p. 32)</p>
1941(昭和16)年
<p>4月5日　夫、瀧口修造、治安維持法違反の嫌疑で検挙される。11月11日釈放。</p> <p>4月25日　『美術文化』6号に《こま》図版掲載。</p> <p>12月16日－20日　美術文化協会第2回小品展（銀座青樹社）に《小品》を出品。</p>
1942(昭和17)年
<p>5月27日から開催の美術文化協会第3回展目録の「同人名簿」に名前の記載がない(展覧会にあわせて刊行された『美術文化　第3回展集』の同人名簿には記載あり)。このころ美術文化協会を退会か。</p>
1945(昭和20)年
<p>5月25日　自宅が空襲をうけ作品を焼失。[典拠：土淵信彦編「年譜」『瀧口修造の造形的実験』展図録、富山県立近代美術館、渋谷区立松濤美術館、2001年、p. 193]</p> <p>8月15日　金沢で終戦を迎える(このとき、父親の鈴木寛也が石川県泉織試験所長として金沢に赴任中であった)。[典拠：土淵信彦編「年譜」『瀧口修造の造形的実験』展図録、富山県立近代美術館、渋谷区立松濤美術館、2001年、p. 193]</p> <p>東京に転居。[典拠：土淵信彦編「年譜」『瀧口修造の造形的実験』展図録、富山県立近代美術館、渋谷区立松濤美術館、2001年、p. 193]</p>

1948(昭和23)年
父親の鈴木寛也、金沢で逝去。[典拠：土淵信彦編「年譜」『瀧口修造の造形的実験』展図録、富山県立近代美術館、渋谷区立松濤美術館、2001年、p.194]
1971(昭和46)年
6月30日 A.ブルトン、P.エリュアール著、江原順訳『シュルレアリスム簡約辞典』(現代思潮社)に《風景》が掲載される(1938年刊行の <i>Dictionnaire abrégé du surréalisme</i> の翻訳)。
1972(昭和47)年
9月 アポリネール、瀧口修造訳『略説 虐殺された詩人』(湯川書房、叢書「溶ける魚」第3冊)に挿画を寄せる(1935年『セルパン』掲載の翻訳「暗殺された詩人」に瀧口修造が訂正補筆して刊行)。
1979(昭和54)年
7月1日 夫、瀧口修造、逝去。
9月 『みすず』233号(追悼瀧口修造)に「終焉の記」執筆(pp.132-135)
1985(昭和60)年
9月 『東京モンパルナスとシュルレアリスム』展(板橋区立美術館)図録に《羊歯たち》《覗く》《休みの日》の図版が掲載される。
10月 『現代詩読本 瀧口修造』(思潮社)に「年譜・補遺」執筆(pp.251-254)
1990(平成2)年
10月 『日本のシュルレアリスム』展(名古屋市美術館)図録に《風景》《スプウンの奇跡》《デカルコマニー》の図版が掲載される。
1998(平成10)年
7月 「終焉の記」(初出：『みすず』1979年9月)が『コレクション瀧口修造 別巻』(みすず書房)に再録される(pp.676-679)
8月15日 心不全で逝去。享年86歳。[典拠：佐谷和彦「あとがき」『第19回オマージュ瀧口修造展 阿部展也』展図録、佐谷画廊、1999年、p.60]